

田倉川と暮らしの会 第3号

1998年10月15日発行

● 田倉川インタープリターズキャンプ開催される



武生ロータリークラブ主催の環境教育指導者養成セミナーが九月二十六日、二十七日「リトリートたくら」を会場に開催された。このセミナーは、当会の資料提供や準備などの協力と支援によって盛況に進行され、集まった受講生から大いに感謝された。インタープリテーションとは、自然や文化、歴史遺産を、わかりやすく人々に伝えることである。それらの知識そのものを伝えるだけではなく、その裏側にある「メッセージ」を、驚きや感動を伴って伝え、相手の感性に刺激を与える技法である。この技法を学びたいと各地から三十五名が集まった。受講者の中には、武生東高校の女子学生や建設省や県・市の行政の方、環境教育を実践している専門家、また三木武生市長も公務を離れて参加した。当会員も伊藤会長、面谷、権八さんらは全日程を受講、宮崎、辻さんは、レストランや会場の奉仕をしながらの参加となった。プログラムは、環境教育の取り組み方、プログラムの作り方などのミニ講座のあと、野外に出て自然解説の実践として、赤谷川自然探検マップをグループで作成し、発表しあった。「赤谷隠谷体感マップ」ではフィッシングゾーン、生き物のサウンドゾーン、スターウオッチング天文台などを、「田倉川アドベンチャーマップ」ではカヌーの冒険コースを、旧分校建物を自然学校の宿舎にと発表した。また、「たくら攻略マップ・探検の森」では、九号土堰堤を土の巨大城壁、滝つぼ風呂、川にある大きな石群を石の博物館、周辺の森を水辺のジャングルとネーミングして愉快的なマップを発表した。いづれも思いもよらない発想と感性に、セミナーの成果が即効したと実感。初めての環境教育セミナーに「参加して良かった」「実践していきたい」と満足、また宅良の素晴らしい景観と施設に感激していた。、都市住民が田倉川の環境を真剣に考えてくれたことに感謝したい。多くの提案やヒントを置いていってくれた。このセミナーを契機に、田倉川を自然学校・環境教育の場として位置づけていければと願っている。



グループに分かれて創り出した自然学校マップ「たくら攻略」



権八会員（写真右端）、若者にまじって照れくさそう。
炭窯や山仕事のユニークな快談に「ゴンパオジサン」すっかり人気者。

● 環境教育お薦め図書

- レイチェル・カーソン著「センス・オブ・ワンダー」新潮社
- 清里環境教育フォーラム実行委員会編「日本型環境教育の提案」小学館
- 小野三津子著「つながりひろがれ環境学習」ぎょうせい
- 自然観峡教育フォーラム監修「インタープリテーション入門」小学館

● 新会員紹介

西野茂生さん：

カヌーの愛好者で、全国百銘川に挑戦中とか。今回のセミナーで田倉川に魅せられ、カヌーで水上から「たくらを眺めてみたい」「少年達にも体験させたい」「土地の方々と交流したい」と入会。（丹南地域環境研究会会員）

● 赤谷大平の山ぬけ



明治二十八、二十九年の大雨で、赤谷上流大平（おおびら）で山ぬけ（土砂崩れ）が発生した（今庄町史）。赤谷は急峻な谷間であった。その谷を大平の土石流がズルズルと樹木を立てたま流れ出した。極めてゆっくりとした速度で、田



倉川まで三日かかってようやく止まり、赤谷の深い谷底を埋め尽くしてしまった。土石流がジワジワと樹木ごと動く様はそらおとろしい光景だったという。幸いにも被害者はいなかった。その後内務省の職員二名が大塚與土太郎さん（由次さんの祖父で大和建設の初代）宅に滞在し、二年間にわたって大工事が行われた。古木集落が中心になって、毎日三百人前後の人が駆り出された。当時古木の戸数は寺を入れて九十三戸で、女、年寄りも子供たちも総出したそうだ。堰堤工事は番号を付け、大平から下流に一号から七号まで石積堰堤を築いた。これはもっぱら男の仕事で、木のソリの木馬に岩石を乗せて舵を取りながら山から引きずり出し、積み上げて行った。女性や子どもたちはもっぱら八、九号の土堰堤工事に従事した。遠くから運んだ粘土を芯にして、さや土は現地調達で築いた。女性たちは、毎日大勢が千本突き（大きな胴突き棒に櫓を利用してロープを沢山付けて多くの人が引っ張

ては落として突き固める）をして二つの土堰堤を築造した。山奥から女たちのヨイトマケの合掌が聴こえてくるようだ。我々会員は専門家も交えて明治の堰堤を探しに出かけた。女たちが築いた八、九号土堰堤は、城壁のような姿で谷を塞いでいる。八号の水通しが雄大な滝になって、轟音と水しぶきを浴びながらの散策道からの眺めは格別である。七号石積堰堤は杉林の中に隠れていた。ここの水落としの景観も驚くばかりの美しさである。石組みが自然の中にすっかりとけ込んで、緩やかに岩肌をくねりながら静寂に流れる水通しに色気を感じさせる。六号も見つかった。茂った森の中に石組みを発見したとき、思わず古代の城跡を創造させた。堰堤は直線の壁としか知識がなかったが、赤谷の石積堰堤はほとんどに袖が付いており、角に丸みがある。。水通しは岩盤を利用して自然に流しているの、長い間に自然の段々をつくった滝になっている。五、四号は、未だ発見していないが、林道を歩くと水通しを落ちる滝の音で存在が推定された。三号石組堰堤は、比較的低い、石はとても大きくしっかりと組まれていた。面谷さんは、「この石は赤谷では見かけたことがない」と話していた。いったい何処から運ばれたものか不思議である。二号石積堰堤は、かなり急峻なところにあった。ここの水通しの大きな滝を見つけたときは一同感激の声を上げ、暫く声も出ないくらいの感動に浸った。百年の長きに自然の流れが造り上げた造形美だ。（写真上）この時代にこれほどの土木工事が行われた背景には、明治六年（1837年）日本に開花したオランダ人土木技術者ヨハネス・デ・レーケ、ジョージ・アルノルド・エッセル等の砂防技術の影響と思われる。この短い谷にたくさんの明治の治水砂防堰堤が健全として遺っているは珍しい。多くの人に見てほしい河川文化遺産である。（大塚由次さん、面谷啓一さんから聞き取り参考にした。田中保土）

（写真は、大平二号石積堰堤の大きな滝 田中和利さん撮影）